

精神障害者の他者志向性が就労働機に及ぼす影響の検討

聖隷クリストファー大学 社会福祉学部
鈴木 文子

問題・目的

精神障害者の定着率の低さ、離職率の高さ

他の障害と比較し、精神障害者の定着率が低い(障害者職業総合センター, 2017)
過去10年間の全国の精神障害者の平均離職率は約44%。非障害者の3倍の離職率(福井ら, 2014)

精神障害者の離職要因

対人緊張から生じる疲労、職業能力や意欲の低さ、精神症状の憎悪(野崎・谷口, 2021)
周囲の理解不足や支援不足、適切な休養の不足、人間関係構築の困難さ(山本ら, 2018)

精神障害者の就労継続要因

職場の一員としての存在であること、社会的関係の広がり生きがい(早野, 2005)
障害者のストレングス強化、従業員による支援や理解など企業内環境の整備(片山, 2012)

他者志向性とは

「自己決定的でありながら、同時に人の願いや期待に応えることを自分に課して努力を続ける意欲の姿(真島,1995)」

他者志向性と就労との関連

大学生において、「貢献志向」が就業動機に強い影響(伊藤, 2009)
大学生の労働観として「社会貢献」「親への配慮」が認められる(佐藤・広田, 2003)

本研究の目的

精神障害者の就労働機において、どのような他者志向的動機が存在するのかを明らかにすること。

自己志向的動機と他者志向的動機の内容を比較、検討すること。

方法

対象者: 就労移行支援事業所の利用者9名

調査方法: 半構造化面接による調査

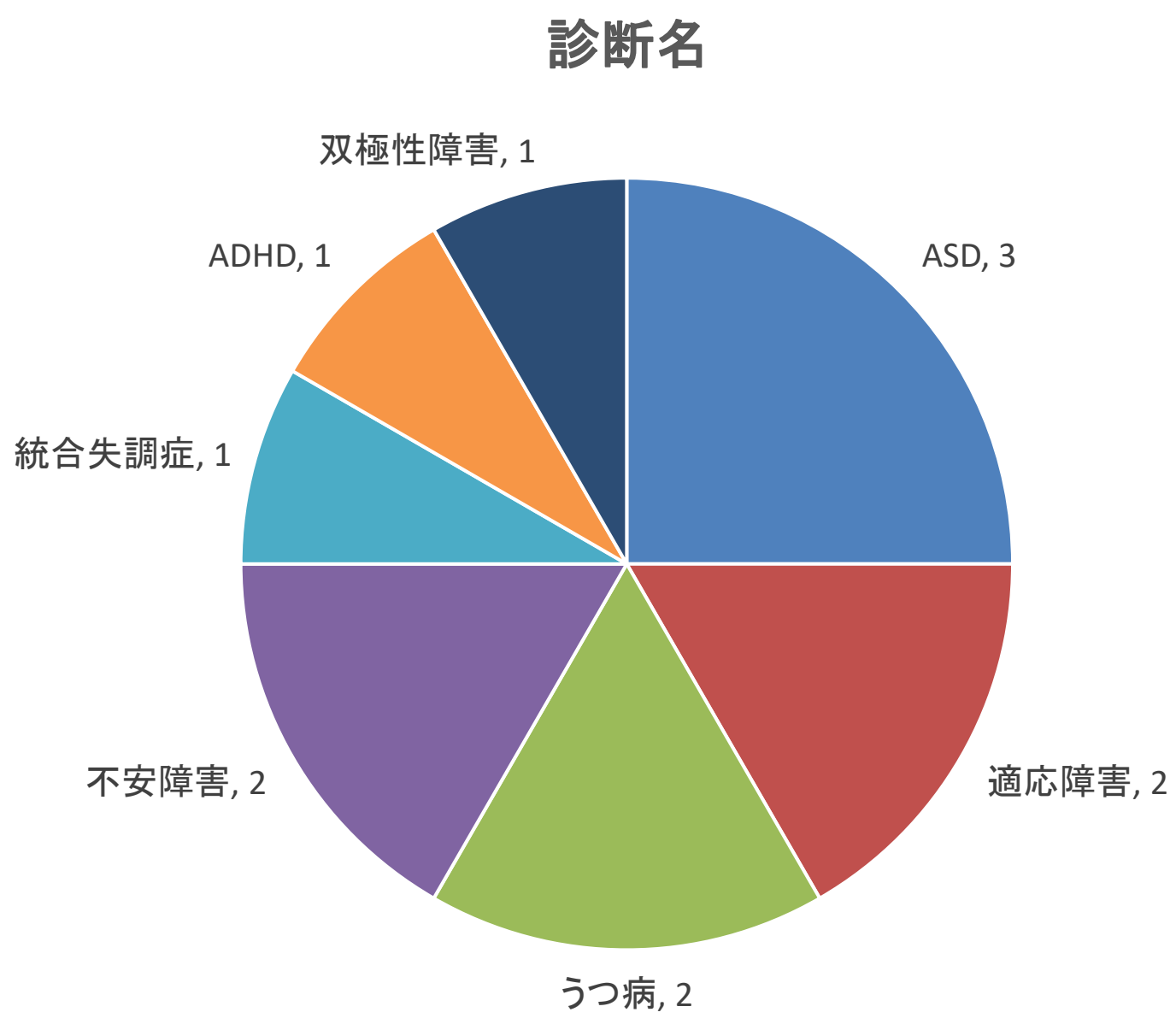
調査内容:

就労働機に関する質問(就職したい理由、働く目的等)
「あなたが就職する目的を教えてください」「何のために働きたいと思いますか？」
基本属性(年齢、性別、診断名、過去の職歴、居住形態等)

倫理的配慮:

本研究は、聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得て行った(承認番号: 24017)。調査対象者に対し、個人情報保護および情報の管理等について説明し、同意を得た。

年齢	33.56±6.82(25～44)歳
利用期間	10.78±6.07(3～19)カ月
性別	男性 2 女性 7
障害者手帳	精神保健福祉手帳 2級 1 精神保健福祉手帳 3級 5 なし／申請中 3
居住形態	一人暮らし 1 家族と同居 8
過去の就労	正社員経験あり 4 パート・アルバイト 9
学歴	大学卒 3 短大卒 2 専門学校卒 1 高校卒 3



結果

分析方法

インタビュー調査で得られた得られた回答について切片化を行い、心理学研究者2名および心理学を学ぶ学生2名によりカテゴリー分けを行った。

得られたカテゴリーに対し、自己志向的動機、他者志向的動機の枠組みから、動機の志向性分類を行った。

動機の志向性	カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な語り
自己志向的動機	自立した生活	経済的自立・自立した生活	自分でお金を稼いで、自分で生活できるようにすることを目指したい。
他者志向的動機	社会の一員	社会との関り、一員として認められたい	社会の一員として働いているのか、機能しているのか
自己志向的動機	自己実現	自分の夢や自己実現	子どものころから夢だった絵を描く仕事がしたい。
自己志向的動機	生活のための収入	生活の安定・お金を稼ぐため	一人暮らしなので、就労をして給料やお金をもらって安定したい。
自己志向的動機	居場所・帰属感	居場所や帰属感を持つ	居場所づくりというか、安定して働ける場所を作りたい。
他者志向的動機	社会的な機能	社会的に貢献したい	社会的に貢献して、働けている自分。
自己志向的動機	心身の安定	心身が安定した生活	脱線しないでレールの上を走っていけるイメージ。
自己志向的動機	生活の充実感	生活を豊かにする	やっぱり、おいしいご飯が食べたいですね。そのためにお仕事をする。
自己志向的動機	働く楽しみと喜び	収入を得る喜び、できることが増える	働いてお金を頂くというのは、自分の中では嬉しいこと。できないことができるようになったときがうれしい。
他者志向的動機	必要とされる実感	相手・家族の役に立てる	自分を支えてくれる家族が安心してくれるのが一番
他者志向的動機	迷惑をかけたくない	他人に迷惑をかけたくない	他人に迷惑をかけないようにすること。負担をかけたくない。
自己志向的動機	将来のため	将来に備える	経験を増やして、次の仕事を探すときに活かせるといい
自己志向的動機	不安の解消	不安の解消	もしまた働けなくなった時のために貯金を増やしておきたい。
自己志向的動機	労働に対する義務感	働かなくてはという切迫感	やりがいをもって誰かと何かをするということを実感したい。

考察

自己志向的動機のカテゴリー

生活の自立、自己実現、生活ための収入等
精神障害者が自立した生活を望むことの現れといえる▼
精神障害者が働くことは自己表現や自己実現につながる(高畠, 1992)
救護施設入所者における自立に関する就労意識の存在(豊田, 2011)

精神障害者の就労働機において

自己志向的動機・他者志向的動機が存在が確認された。
これらが統合していくことで、
精神障害者の就労の動機づけが高められる可能性がある。

他者志向的動機のカテゴリー

社会の一員、社会的な機能、必要とされる実感等
他者や社会とのつながりや、他者に貢献することが動機づけになる可能性▼
社会的に認知されること(高畠, 1992)
自己の存在が必要とされている実感(阿部, 2013)
自分が人の役に立つことの再認識、周囲の人に支えられていると感じることで不安を抑える(中戸川・出口, 2009)

両者の関連性

「経済的な自立」と「迷惑をかけたくない」
自己の自立が家族への負担をかけないことにつながる

「社会の一員」と「居場所・帰属感」

社会の一員として認められることで、
職場への帰属感を高め、社会の中での居場所を求める

自己・他者志向 それぞれの動機につながり

今後の課題

精神障害者の就労働機について、調査研究等を通して、概念を明確にする必要性。
健常者の就労働機との比較を通して、特徴を明らかにする。
就労支援における本人の意思や動機づけに対する支援を検討していく。